

美馬理事講演「科学する心、未来を創る力」

2013.07.26

外資系コンピューターメーカーの見学会が、1977年2月8日に行われた。当時私は、高校1年生。その頃は、まだ、コンピューターは家庭にはもちろんなく、大手企業にしか入っていない時代だった。見学会では、自分の好きな年月日を入力すると、その月のカレンダーが瞬時に印刷されるデモンストレーションがあった。今では当たり前のことだが、その時、私は、「これは世の中を変えるに違いない」「だから、私はこの中身を知りたい」「この仕事に携わりたい」「コンピューターサイエンスを学びたい」と思った。人生の転換点になった。

大学では、計算機科学科に入学した。MITが開発した教育用言語を日本の8ビットマシンに移植するアルバイトをした。その時、「コンピューターは教育を変えるに違いない」と思った。もっとコンピューターを使った教育について勉強したかったが、日本にはなかったので、留学することにした。

公立はこだて未来大学と日本科学未来館を作る仕事をした。そして、日本科学未来館では、2003年から3年間副館長を務めた。

自分の将来を考えたとき、医者や弁護士になりたければ医学部や法学部に行けばよいことは中高生でもわかる。そういった特定の職業以外は、得意科目から進学先の学部を選択することが多く見受けられるが、世の中はもっと幅広いということを理解してほしい。宇宙に興味があれば、宇宙飛行士でなくても、銀河を探索するエンジニアになることも考えられる。医療に興味があれば、医者にならなくても、何千人何万人を救うような医療機器を作るエンジニアになることも考えられる。環境問題に興味があるならば、現場で活動することも大切だが、環境問題を解決し地球を守るエンジニアになることも考えられる。コミュニケーションに興味があるならば、情報通信のエンジニアになることも考えられる。

個人の幸福と社会の幸福の両方を実現できるのが、「理系」という生き方である。なぜなら、自ら選択し、創り出していくことに関与できるからである。

「何か変、不思議、と感じる気持ち」「なぜ、どうしよう、と問う心」「じゃあ、どうしよう、と行動に移す力」が、科学する心であり、社会を変える力、未来を創る力になる。

日産財団は、「ひとを育て未来に夢を・・・」のスローガンの下で、人材育成・教育助成、奨学助成、研究助成を行っている。私も何かできないか、財団メンバーと一緒に考えてきた。本日、財団の新しいプログラム、理数科担当教員の先端研究現場体験プロジェクト「わくわくサイエンスナビ」を紹介する。

「わくわくサイエンスナビ」は、3つのチームで成り立っている

1. 日産財団（わくわくサイエンスナビプロジェクトチーム）
2. 協力研究機関（理化学研究所、東大生産技術研究所、早大-東京女子医大医工連携など）
3. 理数科担当教員

学習指導要領の範囲を超え、教室の子ども達を先端科学技術現場に紹介したい。先端研究現場を理数科担当教員視察して、その中で研究者とのワークショップを開催して、教育現場で活用できる内容を一緒に作り上げる。子ども達を研究現場に連れて行くことは難しい。まずは、先生方に現場を体験してもらおう。先生方も、わくわくわくわく、子どもたちも、わくわくわくわくなるよう、私たちは、そのナビゲートをしていきたい。

“理系”的とは、好奇心にうち満ちて、ものごとを論理的、分析的に考える態度

“女子”的とは、周囲を巻き込んで、わいわい楽しんで、新たなものを創り出す姿勢

と定義する。これから社会を変えていくためには、この“理系”的、“女子”的が大切と考え、岩波ジュニア新書から「理系女子（リケジョ）的生き方のススメ」を出版した。これは、理系文系、老若男女にかかわらず、これからの社会に必要な生き方だと考える。

パーソナル・コンピューターの父 Alan Kay の言葉を紹介して、講演を終わりとする。

未来を予測する最善の方法は、自らそれを創り出すことである。

The best way to predict future is to invent it.

(終了)